

# UIFA JAPON NEWSLETTER

## ■主な内容

- UIFA JAPON役員からのメッセージ
- UIFA会長ドラトゥールさんからのメッセージ
- 第2回海外交流の会 韓国編
- 第3回海外交流の会 イタリア編
- 第4回海外交流の会 国際編
- 今後の事業計画
- 会員の動向
- 役員会の報告

## ■UIFA JAPON 役員からのメッセージ

意見交換の場を……

副会長 小川信子 (日本女子大学教授)

一年目の出足はスムーズであったが、真価を問われるのはまさに二年目であろう。この一年はUIFA JAPONを軌道に乗せるために、お互いに協力しつつ歩いてきた感がある。最近になって、女性が自立した生活を手にするためには、力を蓄えて共生せねばならないと考えさせられる動きがある。二年目は、世界に目を向けつつ、生命の創造に、そして環境を整備する仕事に携わる私達だからこそ、子供や人類の平和のために力を合わせねばならぬであろう。そのためには、国内外のUIFAの方々と連携をする機会として意見交換の場としてシンポジウムなど設けられたらと思っている。

## UIFAとUIFA JAPONと私

総務担当 松川淳子 (生活構造研究所代表)

UIFAの会長ドラトゥールさんに初めてお会いしたのはもう10年以上前のことである。パリの凱旋門の近くの事務所の一室で、UIFAの第6回大会のために世界中から次々と運びこまれる展示パネルを整理したり、訪ねてくる各国の代表者たちとの対応に追われる美しい女性だった。そのシャツ姿のきびきびした様子、温かい心のこもったねぎらいの言葉、ユーモアいっぱいやしぐさなど、一生忘れることがないだろう。世界の友人たちとこんなふうにつきあいたい。UIFA JAPONもそのための小さな芽。皆で大切にしよう！

## ■UIFA会長ドラトゥールさんからのメッセージ

UIFAパリ本部より年末のご挨拶と今後の大会開催予定についてお手紙を頂きました。第10回大会(ケブクワン)は一部でボイコットがあったものの皆の努力ですばらしい大会となりました。第11回は1996年にブタペストで、第12回は1997年に日本で、また同時に女性建築家作品展覧会も開催の予定と書かれていました。

Paris, December 1993

MADAM AND DEAR COLLEAGUE,

On the New Year's eve 1993 the International Union of Women Architects U.I.F.A., is sending you most sincere wishes for good health, happiness and prosperity. We wish also that our meetings may be more and more fruitful, strengthening friendship links between women Architect all over the world.

As well known, our X-th Congress took place in Cape-Town, South Africa. It was one of the most interesting and well organized Congresses, taking place in March 1993 the year of the 30-th anniversary of U.I.F.A. In spite of the numerous difficulties that came across before, as well as during the conference, we had a peaceful and friendly climate. Unfortunately, evil minded persons not knowing the real situation in this country and the efforts its President (now Nobel Prize 1993) has to bring democracy in South Africa, tried to boycott our Congress (see the circular sent by the Committee of the Forum of the Architects women in Denmark, which spread doubt, preventing some of our members to go to Cape-Town. The presence of U.I.A. President Mr. Femi Majekodunmi (Nigeria), as well as the participation of many women Architects from black Africa, was a testimony for the conference and showed friendship to U.I.F.A.

Our next Congress (the XI-th) will take place in Budapest (Hungary) in 1996, with the theme: "Restoration of Architectural Patrimony" (and preservation of its Environment). As usually U.I.F.A. tries to diversify our meeting places, to allow the countries near-by the Congress place to attend the conferences; That's why the conferences of the XII-th Congress in 1997 will take place in Japan, where our members of U.I.F.A. JAPAN are looking forward to welcome us. The theme of this Congress will be: "Harmony in Architecture and its Environment". Of course, the conferences will have also Architect women's works Exhibitions.

We are pleased to inform you that in Japan, a country of great tradition an important Association was founded, the U.I.F.A. JAPAN. Also we are delighted to inform you of the founding F.A.N. Female Architects Nigeria. We wish both of them, along prosperous life.

Waiting to welcome you, in a greater number, at our future Congresses, We send you our friendly greetings.

S.d'Herbez de la Tour

P.S. From Treasurer:

U.I.F.A. lives of its members dues. Therefore, we kindly remind you the necessity of the payment of your dues; thanking you in advance for doing it.



■第2回海外交流会の会 韓国編

漆との縁(えにし)

漆工芸家 全 龍福

UIFAの人達と漆について語る機会を共にできた事は大きな喜びである。建築工事のなかで漆芸と取り組んだ現場は完成後2年、漆の艶も冴え始めている。その日



目黒雅叙園での“うるし礼讃展”会場における多くの会話は、私が日本に足がかりを得て夢中で取り組んできた漆の仕事の意味を改めて新鮮に感じさせるものがあった。家に伝わる漆器の文箱をたずさえて現在の生活の中の漆について話されたパネリストがあり、その文箱の手法の中に遠い過去の日本と韓国との不即不離の文化的な因縁をみた。学校建築が現在の仕事である建築家と内装仕上げに漆を用いることの実用性、それを困難にする現在の状況についての会話も印象深い。

岩手県川井村箱石小学校は村の過疎化により廃校となり、その建屋が目黒雅叙園修復工房として使われた。韓国から仕事に参加した多くの弟子達がここに住み、地域の人々と交流を深めながら、現在の日本について学んでいった。私自身も村に伝わる踊りのための鹿頭(しから)の漆による修理を引き受け、その踊りを学んだこともあった。私の展覧会の作品もこの漆芸工房で制作したのであるが、いまこの漆工芸を地場産業に発展させようという気運が地元に盛り上がっている。

自然界の樹木がもたらす樹液から生成される漆の有用性は、オゾン層の破壊など地球規模の深刻な問題と対峙する事実といえる。その成分のウルシオールは気難しい乾燥状態を要求するまるで生き物のような存在だ。漢方医学には漆による治療法が多くあるが、これは有史以前からの人類の知恵のように思えてならない。一世紀を経た漆仕上げ材の古材に手を加えたところその塗膜粉塵で漆かぶれになった人達がいるが、このたくましくもデリケートな素材がもたらす艶に魅せられつづけて、私の仕事がある。

(写真:全龍福-うるし礼讃展カATALOGより)

目黒雅叙園の漆芸

アトリエM 平井美蔓

繊細に華麗に漆工芸を純化させてきた日本文化があり、日常生活の中には漆もどき仕上げとしての樹脂製品、建築造作現場ではその光沢や色合いを如何ようにも演出できる樹脂塗料が使われる現実がある。そして5トンの漆を使用して漆本来の手法で復元室・再生壁画・新作壁画を制作したスケールの大きい漆芸をそのインテリアにもつ目黒雅叙園も又現実である。

昭和初期の響応施設に多くの漆工を投入した日本画家の作品を中心に総漆仕上げの宴集会室を創り出した施主初代の魂胆は、権力や財力に守られて存続した日本文化の華・金閣寺や中尊寺の漆芸の技を大衆に供することにあったのかも知れない。今般、施設の改築にあたって寸分違わぬ復元を要求した施主に対応できた陣容は全龍福氏率いる韓国漆工人達以外にはないという感慨が大きい。30代中葉でその工事に参画することとなった氏は、工事完了直後、これだけの仕事量があるとは当初とても想像できなかったと述懐された。このために日本語の学習からはじめた氏にとって、施主・設計・施工関係者との十分な相互理解を確認するために、人知れず苦勞されたことも多かったはずである。この日韓交流の意味はきわめて重い。

目黒雅叙園という稀有な現実に保存再利用工事の設計監理として立ち会った私は、漆仕上げ面のもつ豊かな艶の中に千手観音のように膨大な数の手を感じる。内装業界に現れ始めている漆蒔絵まがいのプリントパネルや、漆を皮膜にして“貼る漆”を開発しようとする姿勢の中に漆仕上げの魅力を追求していることは理解できても手は見えないのだ。

漆ことを英語でJapan という。  
“Yong Bok Jeon is japanning”  
(全龍福仕事中)に漆仕上げに関する明日を期待したいと願うのは私一人ではないと思う。





### ■第3回海外交流会の会 イタリア編

#### イタリアの居住環境と

女性建築技術者を語る

伊建研ローマ室長

Dr. アリザ・モリーニ氏



国際シンポジウム「長寿社会

と住まいーバリアフリーを考える」に出席のため来日した Dr. モリーニを迎えて、第3回海外交流会の会が日比谷の星稜会館で開催された。Dr. モリーニは語る。イタリアの人口の高齢化は1990年1月の時点で14.5%で家族の変容も著しい。対策の方向は、高齢化に特化したやり方をできるだけ避け、ポイントは住み慣れた住宅で年をとることを可能にし、施設収容をできるだけ避けることにありとし、技術的手段で援助し高齢化につれて対応できる住宅を確保する方向を目指しているという。高齢者向けの住宅政策は、ごく最近になって導入され、既存ストック、新築いずれにあってもまだ充分でない。自立高齢者へは、ナーシングホーム、政府助成を受けた高齢者グループ住宅、家賃助成、障害者のための改造助成等が提供されている。社会・健康サービスは、地方政府による公的事業を通じて様々な供給がされている。ヘルスケア、ホームヘルスケア、経済援助等である。しかし、公的支出の増加に圧迫され削減の傾向という。いずれの国も大変である。

さて、イタリアにおける女性技術者たちの活躍ぶりは、教育機関等への希望者が多いがなかなか門は狭い。また、管理職は男性15.4%に対し女性は4.5%であるという。同席された Dr. ティーベリ（スウェーデン王立大学教授）にスウェーデンはいかがなりや？と同じ質問を向けると、女性の技術者は35~40%を占め大学の建築学科は50%を女性が占めるところだが、失業者が出る時は大部分が女性にしわ寄せされ、特に若い女性たちにとって厳しい現実であるという。男女格差というこの問題もどうやら万国共通の課題のようだ。

渡辺 喜代美

### ■第4回海外交流会の会 国際編

#### 産業研究会第3回国際シンポジウム

FOR TOMMOROWー世界の中の日本の女性科学者・技術者

UIFA JAPONが初めて他の女性の会(日枝性産婦人科学の会、工技院女性研究者の会、農水省女性研究者有志)と共催したシンポジウムが2月26日(土)千駄ヶ谷の野口英世記念館で開催され185名中、UIFA JAPON会員9名が出席した。

第1部基調講演、Dr. Elizabeth Laverick OBE (前IC WES 議長)が「世界的女性科学者・技術者の活躍」と題して1964年に発足したこの会の国際会議の足跡とその意義を、近藤次郎(日本学術会議議長)が「これからの女性科学者・技術者の国際的役割」を、共に私共の明日の活動の方向を改めて考える機会を与えてくれた。

第2部パネルディスカッションでは、都河明子(日機人科産、東大)を中心に6人のパネリストー足立則夫(日機人科産、東大)、Valerie Ozaki(上野大)、佐々木政子(東大)、田中成子(日機人科産)、Diane Zingale(CityBank Japan)がそれぞれの立場から女性の現状とこれからの課題について意見を述べ、会場からの多くの質問と共に活発な意見交換が行われた。

最後に特筆すべきは本シンポジウムの締めくくりとして3つの提案とその実行を呼びかけたことで、提案2「中・高校の若い人々にもっと科学・技術の面白さを広め、若い世代の理工系離れに歯止めをかけるよう行動していきたい」はまさに明日のために若い世代の育成の重要性を再認識させ、提案3「私達はまず国内での横のネットワークを創り、さらに国際的にも広げ、世界の平和のために国際的貢献をしていきたい」はUIFA JAPONの目指すところでもあり、本会の共催はそれなりの意義はあったと思う一方、次の機会には技術の紹介、研究報告書等、UIFA JAPONの積極的な活動を考えるべきとも思った。



宮坂雅子



UIFA JAPON 事務局

〒105 東京都港区芝公園3-1-8  
芝公園アネックスビル棟生活構造研究所内  
TEL. 03-3459-0221

■今後の事業計画

来年度全体の事業計画については、現在事業担当のグループで計画案を作り、今後、理事会に計り決定する予定です。今回はその中の一つ、もし実現すれば来年度の“目玉事業”になる計画について報告致します。

東京都には、都がその基本財産の全額を出している“東京女性財団”があります。男女平等社会の実現に寄与するべく様々な活動を行っていますが、その一つとして女性の国際的な交流事業への資金助成を行っています。本年度、UIFA JAPONの事業に対してこの資金助成を受けるべく事業担当では、国連の国際家族年にちなんで“家族とすまい—韓国と日本—”というタイトルのシンポジウムを今秋に開催する事業計画を立てました。韓国と日本の女性建築家各2名による講演、パネルディスカッション、質疑応答、懇談会等で構成し、後日、邦・英文併記の報告書をまとめる予定です。

今年1月、上記事業への東京女性財団助成金交付の申込を行い、4月上旬にはその結果が発表され、現在は合格することを願っているところです。

■会員の動向

昨年総会時に65名だった会員数は10名増えて、94年3月現在75名となりました。会員の内訳は、約半数が建築設計事務所関係、その内自営27人、勤務11人。約16%が大学関係、約13%がシンクタンクのコンサルタント、約7%が建設会社となっています。その他、官公庁・公社公団関係者3名、インテリア関係、プレハブメーカー、設備会社、工務店、健在メーカー勤務が各1名です。

UIFA JAPONでは引き続き広く会員を募集中です。入会を希望される方はどうぞ事務局までご一報下さい。

■役員会の報告

第5回役員会（93年7月6日） 役員11名出席

6月の総会の総括及び今年度の事業計画についての討議が行われました。また事務局より6月の入会者についての報告がありました。

第6回役員会（93年9月7日） 役員7名出席

日韓交流の会の計画及び94年1月の海外交流の会の企画内容について話し合われました。

第7回役員会（93年10月12日） 役員8名出席

ニューズレターその他、ミニ情報紙を2ヵ月に1度発行することが決められました。第1回は11月半ばに発行することになりました。その他第2回海外交流の会の企画内容について話し合われました。

第8回役員会（93年11月11日） 役員9名出席

12月の海外交流の会の詳細について討議が行われました。また先に決められたミニ情報紙をUIFA JAPON D' AUJOURD' HUI とすることが決められました。その他会員紹介の小冊子について話し合われました。

第9回役員会（93年12月6日） 役員10名出席

12月の海外交流の会の具体的な準備、1月の海外交流の会の詳細について話し合われました。

第10回役員会（94年1月12日） 役員9名出席

第2回海外交流の会の総括について、また第3回海外交流の会の準備についての討議が行われました。その他会員紹介の小冊子について話し合われました。

第11回役員会（94年2月16日） 役員6名出席

第3回海外交流の会の総括について、及び来年度の事業計画についての話し合いが行われました。来年度は、会員の顔写真付名簿を作成することになり、そのスケジュールについて討議が行われました。



■広報日より

桜の開花も間近、春はもうそこまでやってきています。海外交流の会も去年の12月、今年に入って1月、3月と回を重ね、あっという間に1年目が過ぎようとしています。広報活動も2ヵ月に1回の情報誌発行に、担当者一同スケジュール調整に悩まされたりもしましたが、若い助っ人も入り、軌道に乗り始めました。よりよい紙面づくりにご協力をお待ちしています。

広報担当：飯島 渡辺 川嶋 船津 大高 緑川 宮坂